第 60 回関東高等学校演劇研究大会-横浜会場-

公開用講評文

生徒実行委員会の講評担当者は、各上演の幕間に公開討論を行い、高校生の皆さんが創り上げた劇を、同じ高校生の視点で受け止め、舞台から伝わったものの正体を追求すべく、それぞれの想いを表現、共有してきました。「生徒講評」 は審査とは異なるため、批判や評価を目的とはしていません。私たちが舞台から受け取ったなにかを、率直に表現、そして共有することを大切にしています。もしかすると、上演された皆さんの意図とは異なる受け取り方をしているかもしれません。ですがそれも、観劇した高校生の、素直な感想として受け止めていただければと思います。

【上演 01　神奈川県立神奈川総合高等学校　パノラマランナー2024】

生きづらさを抱える高校生の中野は、行き先の分からないどこか遠くへ行きそうな電車に乗る。電車を降りた先で、奇妙な世界の奇妙な人々に出会う。その人達との出会いで中野は自分の答えを探していく。共感することが多い作品だった。中野の苦しさやしんどさ、現代社会など共感できるところが多かったからこそ感情移入がしやすかったとも感じる。例えば、駅弁売りに出会うシーン。中野は沢山の種類の中から駅弁を選ぶことができた。自分が何をしたいのか分からないのに選択肢ばかりが与えられる状況を、姉の進路選択と重ねる委員もいた。中野は、「分からない」と駅弁を選ばなかったが、そこがかっこいいと思った。

他のシーンでは、「学校を休んだ次の日」と似たような気持ちを感じた人もいた。進んでしまっている時間と自分が感じていた楽しい時間の差による変な焦りだった。

苦しさだけに共感したわけではなく、中野の成長が温かかった。自分のなりたい自分を出会った人に当てはめて選ぶのではなくて、自分の中でなりたいを見つけられた中野の成長は、目の前の人を救おうとする思いがあったからだ。同じ苦しみを持った人がいて自分のことを考えてくれるという温かさ、優しさがこの作品からは伝わってきた。

【上演 02　静岡県立伊豆伊東高等学校　ラフ・ライフ】

ある日、薫の元に届いた１通の手紙。ラブレターだと思い、待っているとそこに現れたのは薫の女友達の黒崎希だった。薫を呼び出した希に「私と漫才やってください！」と言われ、薫と希の漫才「ラフ・ライフ」が始まる。

舞台を教室にするのではなく、渡り廊下にしているのが青春を感じ、セットだけで渡り廊下とわかるのがすごいと感じた。話全体が漫才のようなテンポ感でそれぞれのキャラクターの個性が出ており、表情までおもしろく最後まで楽しく観劇できた。そして観客も巻き込んでひとつの漫才を作り上げているように感じた。物語全体を通じて、希が目指している人を「傷つけないお笑い」、薫や希の優しさが全面に現れている作品であり、仲間がいる温かさを感じた。普段見ることのない笑いの裏側、葛藤や事情を深掘りしていることで、最後の漫才に深みを感じた。「生きている限り可能性ある」というセリフから、頑張ってきたことがいつか報われるように感じたという意見も出た。おもに２人でやるものである漫才を選んだところに繋がりを大切にしようとする希の温かさを感じた。薫は「くだらない話」と言っていたが、希と練習をしていくうちに真剣になり「身内だけは笑わせなきゃね」というふうに変化し、お互いに良い影響を与え合っていると感じた。

【上演 03　立川女子高等学校（東京）　バウワウラランドベイビーズ】

バウワウラランドベイビーズは良い意味でタイトル詐欺すぎた作品だった。たくさんのワンちゃんを散歩する主人公ふうこ、ワンちゃんに集まってくる小学生たち、障がいのあるはーちゃん、それを探しにくる高校生の妹、改造人間にされたと噂のあるお婆さん、様々な人が行き交う「地域の日常の一幕」から始まる。シングルマザーの母は保護犬支援団体をしており、ふうこはたくさんの犬たちと共に生活をしている。そんな普通。

りぼんという犬の妊娠をきっかけに「社会のレールから外れた人々」の姿が徐々に浮き上がってくる。自分も子どもがほしいと譲渡会で叫ぶ、はーちゃん。それがきっかけとなり今まで苦しめられてきたことに限界をきたす妹。そんな妹の話を聞きながら、実はその妹が同級生だと分かり、自分の不登校についての話から、心の闇が明らかになる。りぼんに寄り添うふうこ。「りぼん、、台の上ってね冷たいんだよね。マリーさんもきっと台の上で、１人でつらかったよね…」マリーさん「あんたの赤ちゃん、赤ちゃん、かわいいねぇ」ふうこを見つめる。　母は自分のことを思っている。母の言うことは間違ってない…。間違ってない…？遂にふうこの抱えるものが露わになる。「なんで産ませてくれなかったの。私の赤ちゃん！！」ふうこは子どものようにわんわん泣いた。母の膝元で。ふうこは、拒否していた三者面談に大好きな犬たちを連れて行くことにする。終いには、犬も生徒たちも同じようにじゃれ合い、「私、ブリーダーになりたいんです！」と心の底からの笑顔で言い放つふうこ。

ふうこは産まれたりぼんの赤ちゃんをマリーさんとはーちゃんに見せに行く。３人を通じて命の“温かさ”を感じられた。

【上演 04　茨城県立土浦第二高等学校　奇跡と呼ばれた日】

　クリスマス休戦を題材としたお話。戦争を繰り返し毎日死体が転がるような日々だったがクリスマスの一日だけは休戦し敵味方関係なくお酒を飲み、サッカーをし、敵同士だが贈り物をし合ったり、楽しい時間を過ごした。はずだったのに、次の日からは昨日のことなどなかったかのようにまた戦争が始まる。
　はじめとおわりに出てきた人は、未来(今)を生きる人達だと考えた。戦争は良くないことだと教えられてきたはずなのに、同じ過ちを繰り返してしまう性。戦争の無慈悲さ。戦争で命を失った人たちは全員が弔ってもらえるわけではなく、腕を失ったり、首が曲がってしまったり、中には即死できずに苦しんで命を絶った人もいるだろう。踊るシーンを見てそういったところに無慈悲さを感じた。クリスマス休戦は「奇跡と呼ばれた日」である。だが本当にそれを奇跡と呼んでいいのか。奇跡といってしまえばそれはとても輝かしいものに思えてしまうが、そもそも戦争なんてなければ、こんな奇跡は起こり得なかったことである。サッカーをする、みんなと笑っていられる、そんな僕らにとって日常ともいえる事ですら、戦争の中では奇跡になってしまう無惨さを感じた。国同士の揉め事の解決の策として、戦争しか方法が無いから何度も繰り返してしまうのではないかと考えた。今僕らにとって戦争はどうしても遠い存在になってしまうが、自国を守るために戦っているのかと思うと「もし戦争をする側になったら」などいろんな角度から考えることが必要だなと思った。正直、シリア内戦などは僕らにとっては遠い国であり身近でない存在になってしまっているが、「日本の軍事化」「第三次世界大戦」など今はまだ起きていないだけでこれから先、日本が直接関わってくるようものはもしかしたら起こってしまう可能性があると考えると、決して他人事ではなく戦争が遠い存在ではないというメッセージを受け取った。

【上演 05 市川高等学校（千葉）　ばれ★ぎゃる】

　舞台はとある高校のバレー部。そこの部員たちは全員ギャルであった。しかし部長であるユイはかつての部員であり、誰もが認める最強のギャルである母親に言われるがままギャルの道を進む。そんな中でバレー最強の高校との戦いで敗北を味わったことで、本人は自分自身の生き方に迷いを持っていった。しかし相手校の最強、最藤や顧問の先生からの助言部員たちとの紆余曲折を経て自分と向き合い、自分なりのギャルを見つけ母親に認められることでユイの心の成長を感じられた。
　生徒講評では各々が自分なりの信念を持っているギャルの強さに憧れを抱く声や、ギャルは見た目ではなくそういった精神を持つことなんだというふうに考える声が多く見られた。自分を強く肯定し、それでいて他者も尊重するかっこよさも同時に感じられた。誰だって思いがあれば今日からでもギャルになれる。そんなどこか背中を押されるような暖かさを感じることの出来る作品でした。

【上演 06　山梨県立身延高等学校　クニタチは遥か彼方に】

部員が 3 人の演劇部。地区大会に向けて例年通りに既成台本を探すはずが、部長の桜木が「クニタチに行くために創作をしたい」と言い出す。「国立劇場に行きたい」すなわち全国大会で最優秀賞を取りたい、という突然の宣言は滅茶苦茶なものに思えたが、先生が地区大会前に辞めてしまうことを知り、遠くに行ってしまっても自分たちの作品を観てもらいたいという彼らのまっすぐな思いに心が洗われるような思いがした。

創作脚本を上演する難しさ、それに伴う苦悩、部員同士の意見の食い違いについては委員の中でも共感の声があった。しかし、作中で何度も失敗しながら劇を作っていくうちに、段々と結束力を高め、クニタチという 1 つの目標に向かって絆を深めていく彼らの姿からは、既成台本を上演する事では得られなかったであろう充実感が溢れていた。たとえクニタチに行けなかったとしても、4 人の想いの詰まった作品を上演すること自体が、彼らにとって素晴らしい思い出となるように感じた。

先生の引越しの準備の時に流れていた音楽は、原作のゲームの中でも序曲として使われていた曲であり、別れの悲しさよりも全員の新たな門出を祝うような明るい雰囲気が感じられた。

新しい顧問の先生が居なくなった先生の椅子に座る様子からは、離れた距離にいても 4 人は作品の絆で繋がっていて、今もすぐ側で見守ってくれているような安心感があった。また、当事者以外にも人のためを想って行動する 4 人の人柄の良さが伝わっていたと感じられ、どこまでも人の温かさを感じられる作品だった。

【上演 07　神奈川県立秦野高等学校　ハルキゲニアのとげ】

両親の離婚や学校での人間関係のストレスによって解離性同一性障害になってしまった夏実ともう一つの人格の深冬。ハルキゲニアのキーホルダーを通して、二つの人格が繋がっていく物語。この物語では、二つの人格の協力と自分を受け入れるということが鍵になっているという意見が出た。夏実と深冬は、いじめっ子に取られてしまったキーホルダーを取り返すために二人で協力して立ち向かった。そこで、底抜けに明るい性格の深冬が一方的に夏実を助けるのではなく、お互いに弱い部分を助け合って成長していくところに良さを感じた。また、夏実の中にも潜在的な強さがあり、それがお互いの成長に関わったという意見も出た。次に、自分を受け入れるということについて。タイトルにもなっているハルキゲニアはかつて、上下逆さで化石が復元された動物だ。ハルキゲニアはいろいろな見方ができるが、正解の見方は決まっている。しかし、夏実はどんなところも全部私と捉えていて、良いところも悪いところもすべて自分として受け入れて大切にするという考えに心を打たれた。

解離性同一性障害だと示唆する伏線をたくさん貼っていたり、深冬と夏実の性格の対比が丁寧に取られていたりと、とてもこだわりが伝わってきてとても素晴らしい作品だった。

【上演 08　北杜市立甲陵高等学校（山梨）　届かなかった手紙】

舞台は甲府。現代を生きる女子高校生は祖母からの手紙に LINE で返信することを考えながら、手紙を開く。そこには、戦争で届けることができなかった手紙を届けようとする一人の郵便局員である主人公の話が書かれていた。

終戦から九年経ち、甲府空襲の面影もなくなり、活気あふれる甲府の街で主人公は甲府空襲のせいで届けられなかった手紙を見つける。たくさんの人の力を借りながら手紙を届ける主人公。手紙を届けてくれたことに感謝する人が多い中、主人公は送り主が死んでしまった事実を受け入れられない家族に出会う。その家族に手紙を届けようとするが、家族からは何度も拒否され、それでも何度も届けていると家族は受け取ってくれた。

生徒講評は手紙の大切さや、今だからこそ手紙を書く意味に気づけました。現代を生きる私たちは、手紙を書かずとも誰かとやり取りできます。そんな現代では言葉の価値が下がってしまい、言葉の重さに気づけなくなってしまった人が多いから誹謗中傷などが広がると、私たちは感じました。

作中では戦争に行った人からの手紙もありました。その中に「立派なことしか書けないけど、その人から滲み出る想いが伝わる」というセリフがあり、打つ文字では表せないその人“らしさ”を、手紙では表現できることに気づきました。

スマホを手に入れて、人に手紙を送る文化が減ってしまったからこそ見るべき作品で、私たち観客の心に深く染み入りました。

【上演 09　東京都立駒場高等学校　学校まで、片道 39km】

舞台は演劇部。はるかに憧れていたよしかは演劇部に入部し、他の部員たちと様々な舞台を作っていく。しかし秋大会の練習が始まると、少しづつ人間関係がおかしくなっていく。少しづつ少しづつ上手くいかなくなっていく気持ち悪さにリアリティを感じた。

はるかは幼い頃からバレエを習っており、よしかたちに見に来てよと言った。スキルが上がったものを初めて見せられたときに、自分には何もないという感覚に陥る。憧れているからこそそうなるのだろう。憧れとは理解から最も遠い、という言葉があるが、よしかははるかに憧れを持ったまま理解しよう、ぶつかり合おうとしていて、その精神が心に刺さった。

物語終盤、全員の名前を呼ぶシーンでは、バラバラの電車を使っている全員の心が一つになったように感じ、一人一人の声の力というものが表れていたと思う。

失敗をしてはいけないのではなく、失敗と成功を繰り返していくことが大事だと訴えかけるような作品だった。

【上演 10　清真学園高等学校（茨城）　脱げない】

舞台は日本とバングラデシュ、それぞれの国を生きる 2 人の少女が、バングラデシュのビル崩壊事故をきっかけにして、「安い値段の服」に対する意識を変化させていく作品であった。

この劇の最初と最後の 2 シーンでは、日本人の少女が、サイズのピッチリした服を、脱ごうとしても中々脱げない様子が演じられていた。委員らは、そのシーンに対して大きな印象を抱き、様々な感想がでた。最後の「脱げない」シーンを見た一人の委員は、日本と海外の苦境を知った主人公が、脱ごうしていた状況に注目した。その点から委員は、主人公が日本での生活で抱いていた、「自分だけが苦しんでいる」という観念からの、「脱皮」を感じた。さらに 2 つのシーンを見た委員は、最初の「脱げない」シーンで、観客が笑っていたにも関わらず、最後の同じシーンでは、観客がシリアスになっていて、捉え方が変化していたことに注目した。そこから委員は、観客の反応の変化に対する大きな衝撃を抱いていた。

劇全体を見て複数の委員らは、安いものを買いたい意識と、メーカーが安い賃金で働かせたい意識が浮かんだ。そして、その委員らの中で、それらが繋がり、自身の歪な世界とのつながりによる苦しさを感じた。さらに、委員全体がこの劇を通して、低賃金労働問題への不進展に対する、もどかしさを感じていた。また委員全体が、講評時に一時沈黙をする様子があり、低賃金労働問題への難しさを感じられた。ファストファッションに対して、多くのことを考えさせる良い作品だった。上演ありがとうございました。

【上演 11　千葉県立松戸高等学校　わたし】

元不登校のコトハ（私）の学校に、ワタシと名乗る女の子が転校してきた。不思議な言動をする彼女の正体は、なんとゴリラだった。ワタシの目的は一体・・・？

この作品では人間の‘私’とゴリラの‘ワタシ’の二人を軸にストーリーが広がる。ワタシは過去に戦争によって二度も家族や友達といった大切な人を無くしていた。

私たち人間が動物を食べないと生きていけない以上、上手くバランスを保ち、リスペクトを持って動物に接することが大事だと感じた。それと同時に、戦争が大切なものを奪っていくのは人間だけでなく動物にも起こりうることだと改めて感じた。私たち人間が一人一人考えて行動する必要があるとも感じた。

ワタシは今までずっと大切な人を失ってきたが、それでも学校に行き、自分の言葉で「身の回りの物を大切にしなければいけないんだ」と教えてくれる様子からワタシの強さや気迫を感じた。また、ワタシの姿を見たコトハが自分の意志で、相手の目を見て思いを届けようとしたことや、ワタシの送別会を開いたことを通して彼女の成長を感じた。ワタシの強さによってコトハが思い出した人とのつながりの大切さは、クラスメイトとの和解を通じて客席にも届いた.

コトハの成長する姿やワタシの強さに感動するだけでなく、所々でつい笑ってしまうようなシーンも多く「笑いあり涙あり」という言葉がとても似あう素敵な作品だった。

【上演 12　静岡県立韮山高等学校　昔話をしようじゃないか】

舞台は、とある高校のミステリー研究部。一人の部員の「昔話でもしない？」という何気ない一言から物語は動き出す。部員の石川淋は、自分の昔話として、もらってから開封できていなかったという姉からの手紙を挙げた。そこには謎解きが書かれており、その謎を解き明かしていく中で、淋は姉との大切な想い出を取り戻していく。

討論の中でまず最初に話題にあがったのは、舞台装置の斬新な使い方についてだ。謎解きを中心に物語が進んでいくため、劇中には様々な謎解き問題が登場する。韮山高校は、それを装置の壁に映し出すことで観客も同時に謎解きを楽しめるよう工夫していた。講評委員からは「視覚的にも楽しめるようになっていることで、物語により没入しやすい」「『考える』『楽しむ』を積極的にさせてくれる作品」との意見が出た。

次にあがったのは、劇中の姉妹について。淋は、高校時代自分と同じミステリー研究部に所属していた姉と比べられることや、姉から何か意見を言われるのが嫌なようだった。それはきっと、姉がミステリーにおける「エリート」だったからなのだろう。そんな２人を見て、姉妹や兄弟のいる講評委員たちは「比べられる」というところで共感した者が多かった。

物語が進むにつれて、姉が淋を大切に想う気持ちがだんだんと明らかになっていく。その点で印象的だったのが、姉妹の回想シーンだ。同じ回想が二度出てくるのだが、謎解き前の一度目と謎解き後の二度目で姉の物腰がガラッと変わっていた。講評委員からは淋が姉の気持ちを知ったことで姉の発言に対する印象が変わったからなのではないか、という意見が出た。

斬新さと終始漂うあたたかくて楽しい雰囲気が魅力的な作品だった。

【上演 13　神奈川県立岸根高等学校　MKW48】

高校生活に不安を抱える主人公ミクの前に、歌とダンスと共に現れた沢山のミク。それぞれの世界線は違っているが、全員未来のミク。一人一人が自身の高校生活を話していく。

主人公のミクにネクタイを渡したミクがいました。それは「私を殺した私」であった。だか、自分を受け入れることができた彼女と主人公。最後の「ありがとう今までの私。頑張れこれからの私」は印象深いセリフです。

「私を殺した私」が主人公のミクにネクタイを渡した理由は「私を殺すため」でした。それを「高校に入学して使うため」という理由に変えてあげたことは、主人公が成長し、自分を受け入れられたこと、自分なりの生き方を見つけられたことを示してくれているように感じます。「ありがとう今までの私。頑張れこれからの私」客席に向かって言っていることで主人公のミク、「私を殺した私」だけでなく観客に向けても言っているように感じられました。

他のミクが高校生活を話している時には失敗談を話していました。そこでは、「過去は変えられない」というメッセージ性がありました。それと同時に「未来を変えるのは自分だけ」「自分で自分の選択を決めることができる」ということにも繋がります。

過去は変えられない。だからこそ未来を明るいものにすることができる。自分と自分を大切に思う人を大切にしていかなくてはいかないと教えてくれる作品でした。